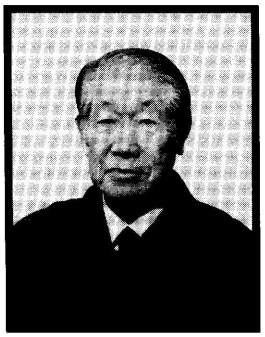
やま

2006年（平成18年度）
NO. 13
日本山岳会山形支部
事務局　山形市清住町2-5-16
長岡　伸恭 方
TEL（023）644-8820

斎藤哲郎支部長のご逝去を悼む

水沢富一郎



平成十九年一月十六日午後二時半頃、自宅に於いて、支部長斎藤哲郎氏は机に向かって仕事中突然倒れ、山形県立病院に、救急車で緊急入院。小脳出血・急性水頭症という重病で手術。医師団の懸命な努力の甲斐も無く、意識不明の儘二月十三日午前九時五十五分御家族の見守る中に帰らぬ人となった。享年七十三歳。

奥様の話によると、日頃は病気らしい病気をしたことは一度もなく健康そのものであったとの事でした。

お父上が台湾で警察官をされておられ、昭和九年三月二十五日現地でお生まれになり、小学校時代は台湾で過ごされたとのことです。台湾には現在元の住居が残っており訪台のときに立ち寄った際はいつも、お帰りといって歓迎してくれる仲間が多くおられるそうです。終戦後父母の故郷である山形市東山に引き上げられた。そして、山形市立商業高校に進学され卒業。山形市役所に就職、その後鉄興社（後の東ソーK.K.）に転職し六十歳の定年迄勤務された。その間旅行案内業の資格免許を取り、定年後現在まで「山形タカセ観光社」を創立。ご子息と共に経営されておられた。

日本山岳会には、後藤幹次氏の紹介により一九六六年十月入会。会員番号六一八四である。お忙しい仕事の中、山岳会役員、ＪＡＣ山形支部長として活躍。又市民の為、山形市の民生委員としてご尽力されたと聞いている。学生時代は山岳部に属しておられなかった様だが、社会人となってからは、職場の山岳愛好会に参加し山々を歩き、特に、北アルプスを好んで毎年登られていた。海外の山や台湾の山は勿論、ヒマラヤトレッキング等にも参加。いつも支部の行事の以外に地区の集会、東京での晩餐会などには進んで参加された。特筆することは一九九〇年藤平正夫氏を団長とした日本山岳会訪台登山交流（合歓山）登山に参加され、母国語ともいうべき、中国語を駆使し交流を深められたことと思う。日本山岳会一〇〇周年記念日本列島中央分水嶺踏査にも支部長自ら進んで参加された。山行の折には、山菜きのこ採りなどの特技もあり、皆を喜ばせた。山形支部晩餐会には、いつも台湾の珍しいお土産を持参ご馳走してくれた。会員の皆も、内外登山、旅行に際しては旅行案内社として特に便宜を図っていただいた。

一昨年は自宅を新築し、ご子息に仕事もゆずられた様子であった。

今回から恒例の日本山岳会晩餐会が地方で行われる事になり、初めて名古屋市内のホテルを会場とした晩餐会に同行して、二人で市内各地を見学した。良く晴れた冬の名古屋城を後ろに私が撮影した写真が斎藤さん生前最後の写真となってしまった。おだやかな方で、いつも紺のスーツにきっちりと、ネクタイを締めた姿が、目に浮かぶ。色々お世話になりました。

ご冥福を、お祈りします。

目　次

●斎藤哲郎支部長のご逝去を悼む……水沢富一郎(1)
●会津百名山を達成して…松田　孝一(2)
●山であった不思議な出来ごと……今野　秀穂(3)
●妻と共に登る「みちのく百名山」踏破せる十六年の歳月瞼に映る…推名　高夫(4)
●近頃雑感…渡辺　誠(8)
●パタゴニア紀行…木村喜代志(9)

会津百名山を達成して

松田孝一

去る〇五年十月二十七日、田島町の権現岩（一、〇三六m）で会津百名山を達成しました。

この中には、日本百名山の尾瀬燧ヶ岳（二、三五六m）等数座、三百名山の会津朝日岳等数座も含まれているが、高さこそ二千米位迄の中級山岳とは言え、道の無い山も多く、藪を掻き分けるか、残雪期の登行が少なくない。

何故会津百名山かと言えば、七八年深田「日本百名山」を十勝岳で終え、続いてJAC選定の日本三百名山を八九年霞沢岳で八人目で終り、九五年当会々員で会津山の会々員でもある川崎精雄氏外四名による「静かなる山」正・続（百九十五座）、九六年山形五十名山、関東百名山、九九年甲信越百名山、東北百名山、〇〇年信州百名山、〇一年新東北百名山、山梨百名山、うつくしま百名山（福島）等を終えての今度の会津の山でした。加令と共に体力の衰えを気にしつつ続ける為には、目標があった方が良いと思い、少しずつではあってもそれに近づきたいし、自分にとっての未登の山や未知のルートを歩くのは楽しい。

九八年発行の「会津百名山」巻頭には「全国的に百名山ブームではありますが、会津百名山に限っては、初級、中級クラスの技量では全山踏破は無理……」とあり、本文には、登山難易度として超上級（登山道無）五座、上級（登山道無）十二座等となっており、いやが上にも登行意欲をそそる。しかしその中にも、峠や湿原も入っており八十五座で止めていたのですが、既に終っていた東京の岳友に、寝た子を起こされ、〇四年から続けて遂に出来たものでした。

今後の目標は少し遠いが関西百名山にし、〇五年十一月六座に登り、〇六年十月全国支部懇談会に引き続き六座の頂に立ちました。

これ等に向かうには冬も歩くのを止めるわけにはいかない。冬期は、以前は関東の山、とりわけ奥多摩等の山に、往復には車で、縦走には電車で行ったりしたが、主なルートを歩き一段落したので、会津の山と平行して山への恩返しも含め、冬のトレーニングとして八森山南から荒倉山を通り由良迄の里山を歩くことにする。それにはまずルートを定めて荒れている道形の手入れから始めなければならない。〇〇年初頭から笹や茨混じりの刈払い、倒木や落枝の片付けなど、それに踏跡さえも無い所もかなりあって、腰の負担になる事が多く、苦しめられたが、飽きる事なく続けた結果、グループや個人を案内できる状態までになりました。最近は地元の刈払いも部分的に行われるようになり助かりますが、その他では、晩秋から初冬迄と春には数回の手入れが必要な事には変わりないようです。△3三角点さえ深い笹で探せなかった荒倉山頂が数十人休める広場となったのは、まさに今昔の感を禁じ得ません。更に△4三角点にはベンチや休憩小屋も出来、集落入口にはカラーの案内板もある今日です。あのズボンは裂け、脚は傷つき血を滲ませたのは何だったんだろうと思う。それでも一日コースの縦走が由良迄出来るようになり、初級の人でも歩ける短時間コースや、積雪期のワカンやスノーシューでは冬枯林からの鳥海山や月山等の眺望もあり、春には可憐な花たちとも出会えるようになっています。或る人が松田新道と言っておりますが、私は全く道のない所に開いたわけではなく、所々に境界石標や、峰境いや古い作業道跡等に手を入れて接続しただけであり、そんな大それたことはしません。誤解の無いようにお断りしておきます。

尚刈払いには鉈や鎌は使用しません。それは効率的ではあっても切り口が斜になり、人にはやさしくないので、手数ではあるが剪定鋏と折り畳鋸で行い、しかも最低限に留めるようにしている。身近かな里山の自然にやさしく接して、その恵みを受けてみてはいかがでしょうか。

ここまで書いて静かに思い返してみると、あの幾度か越した大峠や、通いなれた会津街道も、もう見る事はないかと一抹の寂しさを感じている。

オサバグサ（田代山）

山であった不思議な出来ごと

今野秀穂

私は、山を歩いて五十余年になりました。この五十余年の山の生活の中には、いろいろなことがありました。楽しかったこと厳しかったこと、岳友の死、自分自身の遭難等々想いおこせば数知れません。この数知れない山の記憶の中から、今回は、私が経験した、山で出会った不思議な出来ごとを書いてみたいと思います。

それは、幻だろうと思って読んで下さい。

Ⅰ　私が二十二才のころだったと思います。私達数人で秋田県にある烏帽子岳登山を計画し、仕事の都合から遅く出発しその夜は、烏帽子岳の登山口附近にテントを張ることにしました。終バスをおりた時は、秋の夜は、たちまちまっくら闇になり、そこから、二百米先位にある、湯治場の灯がぽつんとともっておりました。

私達は、その湯治場の前の細い山路を通り、通いなれたテント場に向いました。そこから、テント場までは歩いて二十分程ですが、行けども行けどもテント場につきません。一本路でもありみんな不思議な思いでかれこれ一時間余も歩いたころ、前方に、うっすらと灯りが見えました。

私達は、こんな場所に家があるはずがなく、何かの間違いだろうと思いつつ近づいたところ、その灯は数時間程バスでおりた最初の湯治場の灯りでした。

それは、最初に会った湯治場の灯が再び私達が歩いていた先にあったということです。

Ⅱ　この話は、私が二十四才のころと思います。私達四人は、秋田県と岩手県境の山に春山計画を立て出発しました。その年は、例年になく降雪が多く、なかなか、その日、泊る予定の小屋がみつかりません。日暮れ近くになり、ようやく探しあてた山小屋は、私達の立っている雪の下にありました。スコップやピッケルで雪を掘り戸をこじ開けてようやく山小屋に入り「いろり」に火をたき、夕飯も終り、寝袋に入り、少し睡ったころ、私達が寝ている、隣の部屋の戸をカラカラカラと音をたてて開ける音がします。私達は、この山小屋には、私達しかいないはずだ、多分気の迷いだろうと最初は思っておりました。しかし、しばらくすると又カラカラカラと戸を開ける音が聞えてきます。

そのうち、友達が、いつも山にくるたびお世話になり昨年この小屋で亡くなった爺さんが俺達に会いに来たんではないかといいだす始末です。

このカラカラカラと戸を開ける音の状態は断続的に夜明けころまでつづき、一同震いあがった不眠の一夜でした。

戸を開ける音は何だったのでしょう。今でも不思議です。

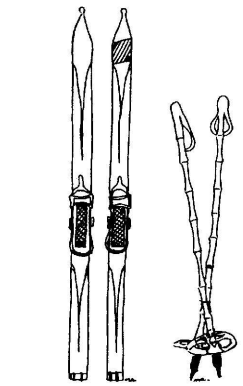
Ⅲ　前の二つの話は、夜の話しですが、今、書くのは、日中の出来ごとです。

これも、私が二十才台のころの話しです。それは、秋田駒ケ岳を下山の途中の出来ごとです。今でこそ秋田駒ケ岳に登るにはほぼ山頂近くまで車が入り簡単に行けますが、当時は、全く下の道路から登りそして下山したころの話しです。駒ケ岳山頂から中生保内に至る、長い尾根を下っていた途中、遠くから白い服を着た登山者がゆっくりゆっくり登って来ます。秋も深まったこの遅い時間にと思い一本路ですれ違ったところ、白い服とスカート、下駄をはき、日がさを持ったうつむいた若い女の人でした。登山口からここまで登ってくる服装ではなく普通の登山者でも数時間かかる険しい山道をよくきたものだと思い感心しながら、すれちがいすぐ後をふり返ってみたら女の人はどこにもおりませんでした。

あの山路ですれちがった若い女の人は、どこに消えてしまったか不思議です。

最近では、昨年の秋、大朝日岳への縦走時、早朝の西朝日岳の山頂で幻のように消えた登山者三、四人がどこに行ったのか今でも時々思い出します。

山ではいろんな不思議にあいます。



妻と共に登る「みちのく百名山」踏破せる十六年の歳月瞼に映る

推名高夫

子供達は親からはなれ、私達も体力的にきつくなってきた時、山に行き汗を流せば一週間元気に働けるような気がしていた。

一九九〇年（平成二年）山と渓谷社で出版していた東北百名山と出合い、その山を目標として登りはじめた。

最初のうちは近くの山から登り順調でしたが、仕事の都合や家族の事もあり思うように進まなかった。経過についてはチェックリスト参照。

東北百名山　チェックリスト

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
1	北部	白神岳	青森県	一、二三二	一九九四・八・一四	三二	本のコース通り八／一三～一四民宿、津梅川泊り
2		十和田山	青森県	一、〇五四	一九九九・九・二九	七〇	迷力平バンガロー泊
3		吹越烏帽子	青森県	五〇八	一九九八・五・四	五九	五／三あすなろ健康館温泉休憩室に泊る
4		釜臥山	青森県	八七九	二〇〇六・六・一一	九六	前日（六／一〇むつパークホテル泊）一九九八・五／四失敗
5		安家森	岩手県	一、二三九	二〇〇一・五・二〇	八〇	くずまき高原交流館プラトー泊
6		兜明神山	岩手県	一、〇〇五	一九九二・八・一六	二一	
7		姫神山	岩手県	一、一二五	一九九五・八・一三	三九	国民休暇村別館へ泊り
8	北部	太平山	秋田県	一、一七一	一九九九・六・二〇	六六	杣温泉泊
9		袴越岳	青森県	七〇七	二〇〇六・六・一二	九七	不老不死温泉（平館）泊
10		五ノ宮岳	秋田県	一、一一五	二〇〇五・六・一九	九四	前日「あんべ」泊り
11		乳頭山	秋田県岩手県	一、四七八	一九九七・八・三〇	五六	前日大釜温泉泊り、孫六温泉泊り
12		白岩岳	秋田県	一、一七七	一九九九・九・五	六九	夏瀬温泉泊
13		縫道石山	青森県	六二六	一九九八・五・三	五八	脇野沢民宿、白波荘前日泊り
14		岩木山	青森県	一、六二五	一九九八・八・一三	六〇	長兵衛旅館泊り
15		八甲田・大岳	青森県	一、五八五	一九九八・八・一四	六一	酸ケ湯温泉泊り
16		南八甲田・櫛ガ峰	青森県	一、五一七	一九九八・八・一五	六二	〃
17		田代岳	秋田県	一、一七八	二〇〇四・七・一三	九一	前日車中泊
18		藤里駒ガ岳	秋田県	一、一五八	二〇〇四・七・一三	九二	温泉ユープラ泊
19		焼山	秋田県	一、三六六	二〇〇六・九・一四	一〇〇	後生掛温泉口

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
20	北部	八幡平	岩手県 秋田県	一、六一四	二〇〇六・九・一三	九九	茶臼口より（後生掛温泉泊）
21		秋田駒ガ岳	秋田県	一、六三七	一九九〇・九・二三	五	日帰り
22		黒森山	岩手県	八三七	二〇〇一・五・二〇	八一	前日プラトー泊り
23		稲庭岳	岩手県	一、〇七八	二〇〇一・五・二〇	七九	新安比温泉泊り、稲庭岳→七両山→安家森→黒森山
24		十和利山	青森県 秋田県	九九〇	一九九九・一〇・一	七二	
25		戸来岳	青森県	一、一五九	一九九九・九・三〇	七一	迷寺平バンガロー泊
26		白地山	秋田県	一、〇三四	二〇〇五・六・一八	九三	花輪線八幡平駅前「あんべ」泊り
27		大白森	秋田県 岩手県	一、二一六	二〇〇三・七・一九	八九	車中泊
28		真昼岳	秋田県 岩手県	一、〇六〇	一九九六・八・二五	五一	前日、湯本温泉あさひ館、前回失敗二回目
29		森吉山	秋田県	一、四五四	一九九九・六・二一	六七	前日、仙温泉旅館泊り
30		岩手山	岩手県	二、〇四一	一九九五・八・一四	四〇	国民休暇村別館泊り、当日ペンション「さかい」泊り
31		和賀岳	岩手県 秋田県	一、四四〇	二〇〇六・六・二四	九八	富神山の会と一緒、奥羽山荘泊り

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
32	北部	七時雨山	岩手県	一、〇六〇	二〇〇一・五・一九	七八	プラドー泊り
33	中部	甑山	秋田県 山形県	九八一	一九九六・九・一五	五三	
34		焼石岳	岩手県	一、五四八	一九九五・六・三	三六	「なるせ」温泉旅館泊り
35		高松岳	秋田県	一、三四八	一九九六・七・一三	四九	
36		神室山	秋田県 山形県	一、三六五	一九九一・六・一六	一三	
37		禿岳	宮城県 山形県	一、二六二	一九九三・九・一二	二三	
38		摩耶山	山形県	一、〇二〇	一九九六・七・二八	五〇	
39		白鷹山	山形県	九九四	一九九〇・一一・二五	九	
40		徳仙丈山	宮城県	七一一	一九九五・五・一二	三五	
41		七ツ森・笹倉山	宮城県	五〇七	一九九五・一〇・二九	四五	
42		鯨山	岩手県	六一〇	二〇〇一・五・五	七六	海浜荘（民）
43		早池峰山	岩手県	一、九一四	一九九二・八・一五	一九	峰南荘

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
44	中部	薬師山	岩手県	一、六四五	一九九二・八・一六	二〇	
45		鳥海山	秋田県 山形県	二、二三〇	一九九一・九・二三	一七	車中泊
46		丁岳	秋田県 山形県	一、一四六	一九九九・一〇・二一	七三	
47		虎毛山	秋田県	一、四三三	一九九六・六・一五	四八	
48		小又山	山形県	一、三六七	一九九五・一〇・二二	四四	
49		杢蔵山	山形県	一、〇二七	一九九二・一〇・一一	二二	
50		栗駒山	秋田県 岩手県 宮城県	一、六二八	一九九〇・一〇・一一	八	
51		五葉山	岩手県	一、三四一	一九九六・六・八	四七	
52		六角牛山	岩手県	一、二九四	二〇〇一・五・五	七五	民宿海浜荘に泊る↓氷上山
53		翁山	宮城県 山形県	一、〇七五	一九九一・五・二	一〇	
54		甑岳	山形県	一、〇一六	一九九四・五・二九	二七	
55		月山	山形県	一、九八〇	一九九〇・七・一	三	

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
56	中部	面白山	宮城県 山形県	一、二六四	一九九〇・一〇・一〇	七	
57		泉ガ岳	宮城県	一、一七二	一九九三・一〇・一七	二五	
58		大東岳	宮城県	一、三六六	一九九一・五・四	一一	
59		大朝日岳	山形県	一、八七〇	一九九七・七・一三	五四	
60		朝日・以東岳	山形県 新潟県	一、七七一	一九九五・一〇・一〇	四三	
61		硯上山	宮城県	五二〇	二〇〇〇・六・一〇	七四	
62		氷上山	岩手県	八七五	二〇〇一・五・六	七七	海浜荘泊
63		朝日・祝瓶山	山形県	一、四一七	一九九四・八・二七	三二	
64		黒伏山	山形県	一、二二七	一九九一・八・一八	一六	
65		神室岳	宮城県	一、三五三	一九九〇・六・二三	二	
66		葉山	山形県	一、四六二	一九九〇・七・八	四	
67		船形山	宮城県 山形県	一、五〇〇	一九九一・五・一九	一二	

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
68	中部	薬莱山	宮城県	五五三	一九九四・五・二二	二六	
69	南部	蛤山	宮城県	九八一	一九九三・九・一九	二四	
70		磐梯山	福島県	一、八一九	一九九四・七・一七	二九	
71		蓬田山	福島県	九五二	一九九五・一一・四	四六	
72		二岐山	福島県	一、五四四	一九九七・七・二〇	五五	
73		浅草岳	福島県 新潟県	一、五八六	二〇〇一・九・二二	八二	大自然館泊
74		蒲生岳	福島県	八二八	二〇〇一・九・二二	八三	三島町宮下温泉「ふるさと荘」泊
75		栂峰	福島県 山形県	一、五四一	一九九六・九・八	五二	蜂にさされた
76		蔵王・熊野岳	山形県	一、八四一	一九九一・七・二一	一四	
77		蔵王・雁戸山	宮城県 山形県	一、四八五	一九九〇・六・三	一	
78		飯豊本山	山形県 福島県 新潟県	二、一〇五	一九九九・八・一一	六八	大日杉切合小屋泊
79		飯豊・北股岳	山形県 新潟県	二、〇二五	一九九四・八・五	三一	門内小屋泊

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
80	南部	飯豊・杁差岳	新潟県	一、六三六	二〇〇五・九・一九	九五	杁差小屋泊
81		吾妻・一切経山	福島県	一、九四九	一九九五・九・一六	四一	
82		猫魔ガ岳	福島県	一、四〇四	一九九五・七・三〇	三七	
83		額取山	福島県	一、〇〇九	一九九九・五・二	六五	
84		二ツ箭山	福島県	七〇九	一九九九・四・三〇	六四	
85		七ガ岳	福島県	一、六三六	二〇〇二・一〇・一二	八七	車中泊（前回）→荒海山
86		田代山	福島県 栃木県	一、九二六	一九九五・八・五	三八	
87		会津駒ガ岳	福島県	二、一三二	一九九一・八・一四	一五	車の中に泊
88		燧ガ岳	福島県	二、三四六	二〇〇二・九・二四	八六	〃
89		小野岳	福島県	一、三八三	一九九七・九・八	五七	
90		青麻山	宮城県	八〇〇	一九九五・一〇・一	四二	
91		蔵王・屏風岳	宮城県	一、八一七	一九九二・七・五	一八	

No.	地域	山名	属する県	標高	初登頂日	累計	メモ
92	南部	西吾妻山	山形県 福島県	二、〇三五	一九九〇・九・三〇	六	
93		霊山	福島県	八〇五	一九九四・七・三	二八	
94		鎌倉岳	福島県	九六七	一九九四・九・一八	三四	
95		荒海山	福島県 栃木県	一、五八〇	二〇〇二・一〇・一三	八八	前日八総小学校に泊る
96		志津倉山	福島県	一、二三四	二〇〇一・九・二三	八四	前日「ふるさと荘」泊
97		安達太良山	福島県	一、七〇〇	一九九四・七・九	二九	
98		三本槍岳	福島県 栃木県	一、九一七	二〇〇三・一〇・一八	九〇	日本山岳会山形支部と一緒、「大黒屋」泊り
99		会津朝日岳	福島県	一、六二四	一九九八・一〇・一〇	六三	いずみや旅館泊
100		御神楽岳	新潟県	一、三八六	二〇〇一・九・二九	八五	「あすなろ荘」泊り前日

その当時は初めての山ばかりで、その山の臭いや風土、人間味のつたわってくる感動を味わう事ができたと自己満足しています。

今後は目標をもたず、低い山でも体力に合った登山を心がけて行きたいと思っています。

おりおりの歌

濃霧のなか猿も登山道を案内す顔もだし青い糞をおきたり

（藤里駒ケ岳）

田子倉湖の蒼き水と鬼が面山浅草岳の眼下に見ゆる

南会津七ケ岳の護摩滝の飛沫あびて身を清めたり

錦繍の那須の峰巒（ほうらん）澄み渡り人々の心に秘めいて洗わんか

（三本槍岳）

牛の群若草食み戯れり牧草の果ての稲庭岳に立つ

放牧場バブルがはじけ守りしを人と牛とを七時雨山は見ゆ

霧に霞む大白森の湿原に野生の草群（くさむら）可憐に咲きぬ

月山の頂に立ち黄金色の庄内平野の輝きを見ゆ

ピューピューゴーと風荒ぶ杁差小屋自然の叫び闇よりききたり

朝明けの紅の彩に染めゆきて影鳥海は日本海に立てり

硫黄が沸き立ち蒸気吹く荒涼たる火口のときめく焼山

近頃雑感

渡辺　誠

森林環境税

平成十九年度から森林環境を保全するために山形県は「やまがた緑環境税」の課税を実施するようである。課税額は一人一、〇〇〇円程度で、住民税に上乗せして徴収し、用途の対象は民有林の環境保全に使用されるらしいが具体的な使途は決っていない状態である。

特に近年は地球規模で、森林の破壊、砂漠化の拡大、土壌・水質の悪化、大気・海洋の汚染、地球温暖化、動植物の種の絶滅をまねき人類の生存に深刻な脅威をあたえている。これらの対策として県の対応にも一理はあるであろう。

しかし、県はバブル期に最上地方に広大な森林を破壊して「県民ゴルフ場」を建設して、バブルが崩壊した後は運営を民間企業に委託している始末である。ゴルフ場の建設は農薬汚染による飲み水の危険など、国土の荒廃に計知れないものがある。残念に思うのは県が緑環境税を課税しようとする前に、県民ゴルフ場を廃止して広葉落葉樹の森林に戻す計

画を樹立しなかった点である。広葉落葉樹の森林は水源涵養林として将来は大きな機能をはたすはずである。県は「やまがた緑環境税」を計画する際に県民に対する説明会を僅か一週間という短時間で終している。県民に考える時間を与えているとは言えない。今年の二月頃に漸く平成十九年度より課税する旨のパンフレットを各家庭に配布する始末である。

県は財源確保だけを急ぎ過ぎて、本来なすべき十分な手続きを忘れてしまったようだ。

大資本の撤退

十六～十七年前に鳥海山スキー場を建設する計画が持ち上がり、建設推進派と反対派が町を二分して運動を展開されたが、鳥海山には絶滅危惧種であるイヌワシの生息地であることが佐藤淳志氏等による長年にわたる調査で立証され、スキー場の建設が中止となった。その調査は並の苦労ではなかったと聞いている。その後、町はイヌワシをシンボルマークにした。

建設推進派は大手資本による開発を誘致し、若者の定着化、過疎化を阻止し、町の活性化をはかろうとしたものと思うが、町民の賢明な判断に敗れたのである。

最近、東北の各地で過去に大手資本を誘致して開発したスキー場の閉鎖が続発している。一時的な目先の夢で開発を誘致すれば、やがて結局は大資本の下請けに過ぎなかったことを知ることになる。

若者が都会に出て行くことを恐れてはならない。若者は自分の生まれ育った土地を離れ旅に出て、そこで初めて自分の故郷を見直すのである。大事なことは若者が帰ってきたくなるような魅力ある街づくり、村づくりが出来ているかということではないでしょうか。

帰りなん、いざ、田園まさに
荒れなんとす、なんぞ帰らざる
（陶潜の「帰去来辞」）

画一化登山者の増加

深田久弥氏の著書「日本百名山」を見ると選定の基準を三つおいている。第一は山の品格である。誰が見ても立派な山だと感歎するものでなければならない。第二は歴史を尊重する。昔から人間と深いかかわりを持った山を除外するわけにはいかない。第三は個性のある山である。個性の顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である。深田氏がこれらを基準にして選んだのが日本百名山である。確かに読むたびに深田氏の山に対する愛情の深さが伝わってきて、山岳文学の名著・傑作と言えるだろう。深田氏が日本百名山を執筆するにあたっては、多くの山々を登り、その中からこれぞという山を選ばれたものと思うが、それは飽くまで深田氏個人の感性によるものである。

近年、日本百名山に登山者が集中しているように思える。特に中高年登山者の増加が目立っている。他人が選んだ山をそのまま自分もなぞって満足している画一化登山者・無個性化登山者が多くなっている。団体登山になると関東方面から貸切りバスで来て、昨日は鳥海山に登ってきた、今日は月山登山、明日は蔵王に登って帰るなどと話しを聞くことが多い。これらサルマネのような登山もゴルフなどのような自然破壊に加担よりはるかに喜ばしいことであるが、若いころに山登りをしてなかった人の場合、自分で山を選ぶことができず、他人の基準に頼りがちになり、手っ取り早く深田氏の日本百名山になってしまうように思われる。どうかそんな登山をやめて、個性的な独創性のある自分の百名山を目指して欲しいものです。

パタゴニア紀行

木村 喜代志

〈はじめに〉

子どもの頃に夢見たアフリカと同じように、山岳部に籍を置いた高校の頃から心に入り込んできたのが、果てしなく遠い遠い存在ながらもヒマラヤ、チベットでありパタゴニアであった。

退職後、初めて南米、ペルーを旅したとき、「一年といわず一日でも早く来るべきところだった」というのが素直な気持ちだった。そしてエクアドル、ボリビアと旅しているうちに、パタゴニアが次第に近づいてきた。これまで読んだ〝パタゴニア探検記〟（高木正孝著）、〝THE NEXT HORIZON〟（地の果ての山々）（クリス・ボニントン著）、〝嵐の大地〟（エリック・シプトン著）や〝パタゴニア〟（椎名 誠著）などから受けた影響も大いに働いていた。強風、氷河と天を突く岩峰、果てしない荒野、そして野生動物のイメージが大きな呼び声になっていた。

二〇〇六年、あれこれ考えた末、個人でイースター島を旅し、その後、ツーカン主催のサンチャゴ発、

ウシュアイア解散の多国籍ツアーによるパタゴニア行を決めた。バスによる二十泊二十一日の旅である。参加者の国籍はオーストラリア（八名）、ニュージーランド（三）、スコットランド（二）、イングランド（五）、スイス（一）、ノルウェー（四）、日本（一）で、ツアーリーダーとドライバーはオーストラリアであった。

〈パタゴニア〉

サンチャゴを出発して四日目、国境を越えたアルゼンチンのサン・カルロス・デ・バリローチェ（通称バリローチェ）に入った。ヨーロッパスタイルの洒落た木造の建物が目立つ街で、ナウエル・ウワピ湖のほとりにひっそりと横たわっていた。

翌朝早く湖岸に出てみた。遠くに雪に飾られた尖峰が並び、湖水はあくまでも青く澄み、空気は冷え、木々の爽やかな香りに満ちていた。カンパナリオの丘にむかう時、眼下のナウエル・ウワピ湖に浮かぶヴィクトリア島があった。遠望する限りでは何の変哲もないが、アルゼンチンの人々が鼻を高くするアラジャンの森があると聞いた。ウォルト・ディズニーがバンビの森のインスピレーションを得たというサルスベリに似たすべすべした赤い幹の樹木である。しかし、対岸の氷雪のトルナドール山群から湖面を渡ってくる寒風は身を切るように冷たく、時折バランスを失うほどの強さだった。

展望台のあるレストランで冷えた体をホットチョコレートで温めた。テーブル上の砂糖袋は氷山とペンギンの絵と大きくパタゴニアと印刷されていた。ここはパタゴニアの入口だった。

七、八日目、バリローチェからプエリト・モレノ経由エル・チャルテンまで二四、五時間、一、一五〇㎞のロングドライブだ。パタゴニアの荒野をただひたすら南を目指す旅が始まった。道路の大部分は未舗装で、野を越え、丘を越えていた。大きく波打つ大地の端まで一：三〇時間ほど、また同じく大きくうねる大地が続く。心のどっかで、今度は「海」でも見えるのではと漠然と考えるのは島国育ちの証だ。忘れた頃に車とすれ違う。土埃が煙幕のように舞い上がる。雨でも降らない限り何日でも空中で舞い続けるのではと思いたくなる量だ。

道路に沿って、あるいは道路から直角に頼りない木柱にばらせんが張られ、視界から消えるまで伸びている。たまに道路沿いに大地主が経営する牧場、エスタンシアの表示が見える。その遥か彼方に人家が見えるが人影はない。パタゴニアは無人の荒野だ。乾燥と強風が大地を浸食し、地衣類すらはえない剥き出しの地肌があちこちに見える。同時に、相反するようだが時々水を湛えた河川が流れ、湿地もあり、野生の鳥たちで賑っていた。

樹木はなく、少しの潅木と地に這いつくばる雑草のみの、無表情に近い荒地が続く。トイレタイムで潅木や丈の短い草地に入り込むと、必ずといって良いほど白骨に出くわす。確かに、車窓からばらせんの側に羊などの死骸を何度か見かけたが、それとは別に連綿と続いてきた食物連鎖による自然の掟の結果だろうか。パタゴニアはぬくぬくとした気候の下で身についた常識を超えるところであった。

パタゴニアの背骨、アンデス山脈の降水量が年間四、〇〇〇㎜とも五、〇〇〇㎜ともいわれている。このとんでもない雨量が広大な氷床をつくり、多くの氷河を四方に押し出している。西側は悠久の時を経て太平洋に落込むフィヨルドを刻み、東側は豊かな水となって南極ブナなどの森林を育んできた。その先が乾燥した平坦で広大なパンパだ。雨を降らせ終わった偏西風が氷床と氷河で冷やされ重い風となって吹き続ける。この寒風に吹きさらされ、荒れ果てたパンパの大地がパタゴニアだ。しかし、荒涼とした風情は人々の心を捉えて離さない不思議な魅力も秘めていた。

〈パタゴニアの顔：山〉

エル・チャルテンは、西部開拓時代を彷彿させるところであった。一本のメインストリートが三〇〇ｍほど伸び、交通信号なし、舗装道路なし、道路片側に数件の小さなレストランとお土産物屋が並び、反対側が草原の広場で、ブランコなどの遊戯具があった。そしてホテルは集落を取り囲むように郊外に散在していた。レストラン前に、店内に持込めないほどの大きなザックがごろごろとある。行き交う人々の多くは、髭面でこざっぱりとした身なりとは程遠い。飛び交う言葉もまちまちである。パタゴニアを代表する山、氷河から突き出た岩峰フィッツロイ（三、四〇五ｍ）とトーレ（三、一〇二ｍ）を目当てに来た人々だ。今日は、垂れ込めた暗雲に隠れて見えない。

翌日、二班に分かれてガイド付きのトレッキングだったが、お目当ての山は隠れたままで、今にも雨が降

り出しそうな空模様だった。思い切ってトレッキングをキャンセルし、個人で歩き回ることにした。雨のフィッツロイ展望台で日本人の若者と会った。居合わせたブラジルから来たという女性ジャーナリストと三人で、天候ばっかりはどうにもならないことを嘆きあった。

明日、午前中の自由時間に賭けることにし、ホテルのロビーでくつろいでいる時だった。痩せ型で物静かなボーイが話しかけてきた。私が、先日見えたカナダ人の生き写しだという。狐につままれた感じでいると、分厚い記録帳を開き文末のサイン、〝サッチー益田〟を指差した。何と、今年の三月、カナディアン・ロッキーを〝Hut to Hut〟でスキーと登山を楽しんだとき一緒だったキャンプマネージャーだった。

四時過ぎに目が覚めた。ぴりっとした寒気の中に未明の岩峰がにょきにょきと立っていた。これこそが求めてきた山々であった。十一時に戻ることを書き残し、五時に宿を抜け出した。昨日の展望台まで一：三〇時間、息を弾ませ急いだ。目の前に天を突くように並ぶ尖がった岩山は威圧感に溢れ、荘厳な朝日を浴びていた。静寂を打ち破るのはバシャ、バシャというシャッターの音と、自分のつぶやきだけだ。風もない。

マドレ湖とイジャ湖方面に進み始めた時、地塘群に逆さフィッツロイ山群の空の青、氷雪の白、山の茶色い岩肌があった。ぴりっとした早朝のトレックは気持ち良い。次々に現れる湖は野鳥の遊び場であり、草原にはウサギが跳ね回っていた。フィッツロイ川に近づくと、隠れていたトーレ、コルドンアデラの山々が姿を現した。なかでもトーレはヨーロッパアルプスの針峰群と似ていないでもないが、根元から垂直に天にむかって聳え、一際目立つ山だった。すっきりした気分で、ホテルに戻ったのは十一時を十分ばかり過ぎていた。

フィッツロイの南一六〇km、パタゴニアのもう一つの顔、パイネ国立公園がある。〝パイネの角〟と呼ばれる奇怪な姿を遠望されるところでバスは止まった。薄い霧に霞んで見えたが写真になる眺めではなかった。チリ政府が保護に取り組んでいる成果だろうか、公園が近づくとグアナコの群れが現れた。アルパカやリャマと共に南米を代表するラクダ科の動物だ。茶褐色で優雅な姿態はサバンナに住むインパラに似ていた。

公園入口でマイクロバスに乗り換え、五、六kmほど入ったラストーレスキャンプ場からパイネトーレス、〝パイネの塔〟を目指して登りはじめた。天候は完全に回復し、雲ひとつなく晴れあがった。長いバスからの開放感を味わいながら、パイネ山群北東面の裾を三時間弱、せせらぎに耳を傾け、ひんやりする木立の中を気持ちよく歩いた。チレノ小屋からしばらくは野趣に満ち溢れた自然庭園の感じだったが、次第に水がなくなり、木々が姿を消し、岩塊がごろごろしたモレーンの急坂になった。火照った体に気持ちよかった風は次第に肌に突き刺さるようになってきた。

後退堆石の鞍部に立ったとき、小さなエメラルドグリーンの氷河湖とその上に氷河を従えた奇怪なパイネの塔が屹立していた。一、五〇〇～六〇〇mの天然のオベリスクだ。みんな一様に驚嘆の声を発した後は暫らく動けない。我に返ってシャッターを切る。そして、岩陰に身を寄せ寒風を避けざるを得なかった。キャンプ場から四時間弱のコースだった。

今日からテント泊三日である。食事、シャワーつきに加え、四、五人用テントに二人だから手足を伸ばしても余裕があった。テントサイトはペオエ湖東端で湖面越しのパイネグランデ、クエルノ山が一幅の絵画であり、カイケン（マゼランガン）のつがいが草原で餌をついばむ長閑なロケーションであった。パイネグランデは、山の概念とはおよそかけ離れた奇怪な岩塔で、名称通りの「角」だった。白っぽい岩に赤っぽい岩が乗った一枚岩の壁で、一本のクラック（割れ目）も見えない。氷河が削り残した奇岩峰だ。その西に位置する主峰パイネグランデ（三、〇五〇m）が尾根形の堂々とした風格で、雪煙を巻き上げていた。

翌日、ペオエ湖をボートで横断し、フランセス谷にむかった。ペオ

グアナゴ（アルパカと並ぶアンデス地方特有の動物）

エ小屋からスコットベルグ湖沿いに七・五㎞歩き、パイネの角とパイネグランデの間に伸びる谷、七㎞である。そして、上流からは昨日のパイネトーレスの背面が望まれるパイネの核心部である。

三日目は、再びペオエ湖を横断し、ペオエ小屋からグレー湖沿いに十一㎞歩きグレー氷河を目指した。

〈パタゴニアの顔：氷河〉

パタゴニアのもう一つの顔に氷河がある。その規模は、南極大陸、グリーンランドに次ぐ面積で、氷河の国立公園が世界遺産として登録され人気を呼んでいた。この度、手にしたフィッツロイ、パイネの地図にもたくさんの氷河が記されていた。しかし、このあたりの緯度を見るとおよそ南緯五〇度である。これを北半球に当てはめてみると、サハリンの中央部、ハバロフスク、ウランバートルキエフ、プラハ、ロンドン、シアトル、バンクーバーで、氷河のイメージが湧いてこない。氷床の発達するパタゴニアはアンデス山脈の南端に近く、最高峰のサン・ヴァレンチンでも四、〇二五m、他は精々三、〇〇〇mそこそこである。標高が特別高いということもないから、偏西風による周年降水型による多量の雨こそが氷河を涵養しているといえる。ペリトモレノ氷河、スペガッティー氷河、ウプサラ氷河、グレー氷河などなどが観光上知られ、年間に平均一〇〇mから二〇〇m移動するといわれている。この速さが、氷河崩落を観察しやすく人気を呼んでいる。

パイネトーレス（パイネの塔）

この度はペリトモレノ氷河とグレー氷河を時間をかけて見ることができた。パイネ三日目のグレー氷河は、アップダウンを何度となく繰り返した後、突然遥か彼方に姿を現した。先端部の縦に割れたぎざぎざが見える。氷河から吹き出す風は冷たさを通り越し痛かったが、なだらかな傾斜で雲の彼方まで続く広大さは氷床そのもので、しばらく見惚れてしまった。今年三月、カナディアンロッキーの人を溶かし込んでしまいそうなアイスフィールドや昨年十一月の東チベットで見た傾斜二度という来古氷河と相通じる眺めだった。足元のグレー湖には先ほどから崩落した氷塊が漂い数千年ぶりに水に帰ろうとしていた。

グレー湖小屋・キャンプ場からボートに乗り、氷河クルージングを楽しんだ。湖に落込む氷河先端部は五〇～六〇mの高さで、縦に割れた氷柱で青白く輝きながら乱雑に立っていた。そして、地鳴りに似た轟音とともに何度となく崩れ落ちていた。氷河の先端部に接近するにつれて、湖面は氷塊で埋まってきた。一際大きな塊、長さ四、五〇mが完全な蒼氷であった。

クルーが湖面から氷塊をすくい上げ、オンザロックをつくってくれた。グラスの中の氷からぱちぱちと音をたて数千年前の空気が染み出ていた。体質的に一気に飲み干すことはできないが、太古を飲み込む時は不老長寿に効くようでハイな気分になった。

帰り際、一瞬陽光が射した。氷河も、氷塊もそして回りの氷雪の山々も一日の美しさを凝縮して見せてくれた。氷河の雄大な眺めと感覚的に捉えることもできない長大な時間の流れのなかに身を浸しながら帰路についた。

この日、帰りのボートが遅れたこともありキャンプ場着が二一：三〇時だった。でも、ここ地の果てに近いパイネが夜の帳につつまれるのは二十三時頃である。明日は、プンタ・アレーナスを目指して十一時間のロングドライブの日だ。

編集後記

斎藤支部長の突然の訃報に驚きと共に諸々の面で一時パニック状態になった。しかし、会員の協力にて、支部報も年度内に発行する事が出来感謝申し上げます。故斎藤哲郎氏のご冥福をお祈りします。

暖冬の為、スキー場は軒並み雪不足に見舞れたが、山形蔵王だけは豊富な雪の為、我々も其の恩恵に預った次第である。

十九年度は社団法人の公益性が求められ合せて、支部会員の減少や高齢化対策を考慮した事業計画を進めなくてはならない。前途多難なスタートである。

（事務局）